

「再話」論の射程

重信 幸彦

「再話」は、一九五〇年代の民話運動以来、主に、児童文学領域において、口承資料を素材にした創作を論ずる際に使われてきた概念であった。第五八回例会シンポジウムでは、この「再話」を、広い意味で既存の話を「語りなおす」こととしてとらえ、児童文学の領域から、より広く「口承」という問いの全体に関わる概念として位置づけなおしていくことを提起し、話の伝承の過程を、ゆるやかな「再話」の連鎖としてとらえていく可能性について検討した。

メディアという問い

こうして「再話」という概念を考え直そうとした背景には、この十年ほどの間に、口承研究においてメディアという問いが議論されるようになり、「口承」という事象を多様なメディアの重層性のなかでとらえる視点が具体化されてきた経緯がある。メディアという問いにより、口承の場と、他の文字・活字・

二次的音声・映像など非口承メディアが形成する場とを峻別するのではなく、それらの絡まりそのものを、ひとつの過程としてとらえていくことが可能になった。

それによって、「口承」こそが「真正」な「基層」的民間伝承であり、非口承によるものは再利用された「表層」的事象である、という二項対立的イメージを問い直していく可能性が拓かれることになった。

しかしそれ自体は、「口承」という問いにおいて、決して新しい問題ではない。一九一六年に、柳田國男が書いたと思われる「童話の変遷に就きて」『郷土研究』四卷六号』は、ある資料集のなかに「イソップの筋を引いた巖谷小波氏の手にもかかったかと思う」話を眼にし、「もう「話」が無くなったと云う悲しみ」を記し、昔話が「不純粋」になっていると指摘していた。一方、同じ年に高木敏雄は『家庭文庫 童話の研究』のなかで、「明治以後になって新たに輸入されて民間に採用されたもの」を含めて「日本の童話界の豊富」をうたっていた。この「不純粋」と「豊富」という正反対の評価は、対象の本質の問題というよりも、あくまでも選ばれた視点の問題であった。

ドイツの民俗学者レジーナ・ベンディクスがドイツとアメリカの民俗学の歴史を検証して指摘したように、より古風なものに「純粋」を求め、そこに「真正性（＝authenticity）」を追求していく民俗学や口承文芸研究の思考自体が、歴史的産物であった [Bendix, *In Search of Authenticity: The Formation of*

Folklore Studies, Wisconsin, 1997」。古風なものに「真正性」を求める視点が、一つの歴史的な役割を果たしたとすれば、反対に、重層するメディア状況のなかで話に接し、それを吸収・換骨奪胎しながら語り直していく口承の場の想像力に着目することも、一つの可能性をはらんでいるはずであった。

「伝え・伝わる」過程と語り手という問い

我々はすでに、そうした視点を具体化していくつかの成果を見ることができている。たとえば、小泉八雲の作品やグリム童話などのように口承の想像力と滲みあい還流したかを検討した大島廣志による「伝承の近代」という問い「大島『民話 伝承の現実』二〇〇七」や、「和製グリム」という考え方を通して提起された久保華誉の「受容と変容」という問い「久保『日本における外国昔話の受容と変容 和製グリムの世界』二〇〇九」などを挙げるができる。大島は、翻案、口演童話活動、寺院の説教、学校での教師の話、旧制中学の英語教材など、近代における多様な媒介の存在に注意を促し、久保は、語り手たちがどのように本来日本になかった話を知り、それを自分達の話にしていったのか、その主体のありように焦点化していく必要を提起している。いずれも「口承」という場にやどる「語りなおす」すなわち「再話」的想像力の過程を問うているともいえるであろう。

さらにこうした視点は、「語り手」をめぐる議論にも接合する。関敬吾の「昔話生物学」、武田正の「作」を入れる」、高木史人の「伝承動態」、野村敬子の「語り手の生活史と語り」、そして川森博司の観光という環境における「語りの形成」などの議論が追求してきた「語り手」のありようから浮かびあがるのは、口承の語り手たちは、決して透明な伝達媒体ではなく、自ら選択し工夫する主体的な存在であるという事実だ。こうした語り手のありようも、「再話」という問いの射程にある。

聞くこと・記録すること

そしてもう一つ、「再話」という概念により、私たち研究者が聞き・書くという過程を捉えなおすことができるだろう。手軽な録音機を当たり前のように使うようになり、私たちの「聞き書き」は、あたかも録音機が再生する二次的な「声」を文字化していくディクテーションのように、透明な過程としてイメージされるようになってしまったようだ。

しかし、録音機は、あくまでも私たちの耳であり記憶の身体能力を「拡張」するメディア（＝道具）でしかない。もちろん、他者のことばに耳を傾けながら使用する筆記用具と紙もそうした「拡張」の道具の一つである。私たちが「口承」のことばを聞き、書き記してきた歴史のなかで、「聞く」という場に録音機が存在している状況は決して当たり前ではなかった。その時、

書き記し記録するとは、どのような過程だったのだろうか。

宮本常一の「土佐源氏」の検討のなかで、それが「話者の語り口をそのまま忠実に再現した」文体を採用しながら、宮本の創作を含んだ叙述であることが明らかにされ批判されている。「井出幸男」「土佐源氏」の成立」（『柳田國男研究年報3 柳田國男・民俗の記述』二〇〇〇）。フィールドワークに根ざした学のあり方を問うために、そうした検討は極めて重要だ。

しかし、宮本の聞き書きを「語られたまま」の事実として賛美すること、それを創作として批判することは、実はどちらも、聞き書きが生み出すことばをゆらぎのない客観的な資料にできるという、ナイーブな「信仰」と表裏の関係にある。私たちの聞き書きは基本的に、語り手と聞き手の相互行為のなかで生み出されたことばを、聞きそして書くという身体的営みをとおして記憶／記録する実践であり、さらに、その過程を下支えする録音機器などの道具の歴史的展開に規定されている。紙と筆記用具という道具を媒介とする場合と、録音機器という道具を媒介する場合と、それぞれ、私たちの記憶／記録の過程がどのように異なるのか、それは、民俗学や口承文芸研究において問われるべき認識の生産に関わる歴史の問題である。

その意味では、「学問としての民俗学の資料」のありようもそうした歴史の産物であるといわねばならないだろう。少なくとも、小さな録音機器が手軽に使えるようになった私たちの時代の聞き書きと、そうした道具が当たり前ではなかった時代の聞

き書きとの間には、測定すべき歴史的な距離がある。録音やメモなどの道具を使わず身一つで相手のことばを聞き、後からそれを想起しながら記憶のなかの語りのリズムに従い書き記すということもまた、聞き書きの一つの方法なのではないだろうか。それは、これまで蓄積されてきた口承文芸の資料、さらには今も続けられている「口承」資料の生産についても同じ問題を指摘することができる。

フィールドワークにおける「聞く」という営みが、決して録音機器が録音するような透明な過程ではないことを見据え、その限界とともに、生身の人間が「聞く」ことの積極的な意義を問うことも口承研究の役目の一つであるに違いない。そもそも、録音のデイクテイションすらも、声から文字への翻訳であり編集、すなわち「再話」の過程として考え直す必要があるだろう。

シンポジウムへ

シンポジウムでは、二つの論点について「再話」論の可能性が検討された。一つは、伝承の過程について、従来のような「口承と書承」という二項対立的な視点ではなく、口承を含めた多様なメディアの重層性のなかで展開している伝承の動態を捕捉する視点としての「再話」論、もう一つは、そうしたメディア状況のなかで、「口承」のことばを聞き、記録を作成し、それをもとに学問実践を展開している口承研究の現場を捉えなおす

視点としての「再話」論である。

「再話」という問いの全体像について、米屋陽一「再話」論の射程（再話・再話史を考える）が、民話運動における再話論をふまえて、録音機器によらない時代の資料としての「民俗学的再話」、民話・児童文学における「文学的再話」、そして廉価本として普及した「廉価本再話」という大衆文化的メディアにおける再話をとりあげ、「再話」という問いを歴史的に俯瞰し、その可能性の幅を明らかにした。

そして研究者の聞き書きと記録化の過程について、藤久真菜「再話と採話」記述は揺れる」が、速記という手段を使い記録を作成した岩倉一郎をとりあげ、異なった媒体のなかで、異なった叙述が模索される過程を追い、記録という営みがはらむ「ゆらぎ」を明らかにした。そして、文字化されると一見決定稿のように見えるものの、「聞き」「書く」という営みは、常に「更新の可能性」を内在させていると指摘し、「採話」と「再話」を切り結んでとらえる可能性を示した。また、岩倉が速記という手段を使ったことにより、むしろ叙述の試行錯誤が可能になった、という指摘も録音機器を当たり前のように使う我々にとって示唆的な指摘であった。

フロアとのやり取りでは、特に、研究者自身がどのように声を聞きとり記録化しているかという問題について、多くのコメントがあった。昔話の不変部分・可変部分という考え方の問い直しの必要性、録音機に依存したため、録音された音のみが資

料化され、かえって語りの空間や場のありようが資料化されなかったこと、などが指摘された。

そうしたなかで、野村純一の「見えないテキスト」という考え方に言及しながら、語り手はもちろん、記録を作成する研究者、そしてそこから文学的作品を作成する者も、それぞれ自分たちが「再話」する際に規範としている「見えないテキスト」を持っているのではないか、という小堀光夫のコメントは、「見えないテキスト」という補助線をひくことで、「再話」論の射程をいつそうクリアにし得る考え方として印象に残った。

「再話」論を問い直すことにより、「聞く」という営み、書きとめ「記録」を作成するという営み、論文を書いて対象に意味と価値を付与する営み、作品へと再創造する営み、翻案・翻訳する営み、そして語り手が語るといふ営み、これらを全て「再話的想像力の展開」とでも名づけるような一つの地平に置き、その歴史と構造を眺めわたすことはできないか、というのが、今回のシンポジウムで考えてみたかった可能性であった。

それは、まだ議論のとは口に立つことができただけで、今後に委ねられた問いとしてあり続けている。

*なお会報「伝え」第四十六号に、会報編集担当者によるシンポジウム概要の紹介と、昔話の「本文」とは何かという刺激的問いにひきつけた参加記・廣田取「昔話の本文『伝え』をどこに求めるか」が掲載されている。参照されたい。

（しげのぶ・ゆきひこ／北九州市立大学）